

東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所

要覧 1976







# 概要

## 歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究，ならびにこれらの地域における諸言語の辞典編纂，および教育訓練を行なうことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語，およびそれを通じて，これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため，言語研修を実施すること。

以上の三点が本研究所の主要な目的です。

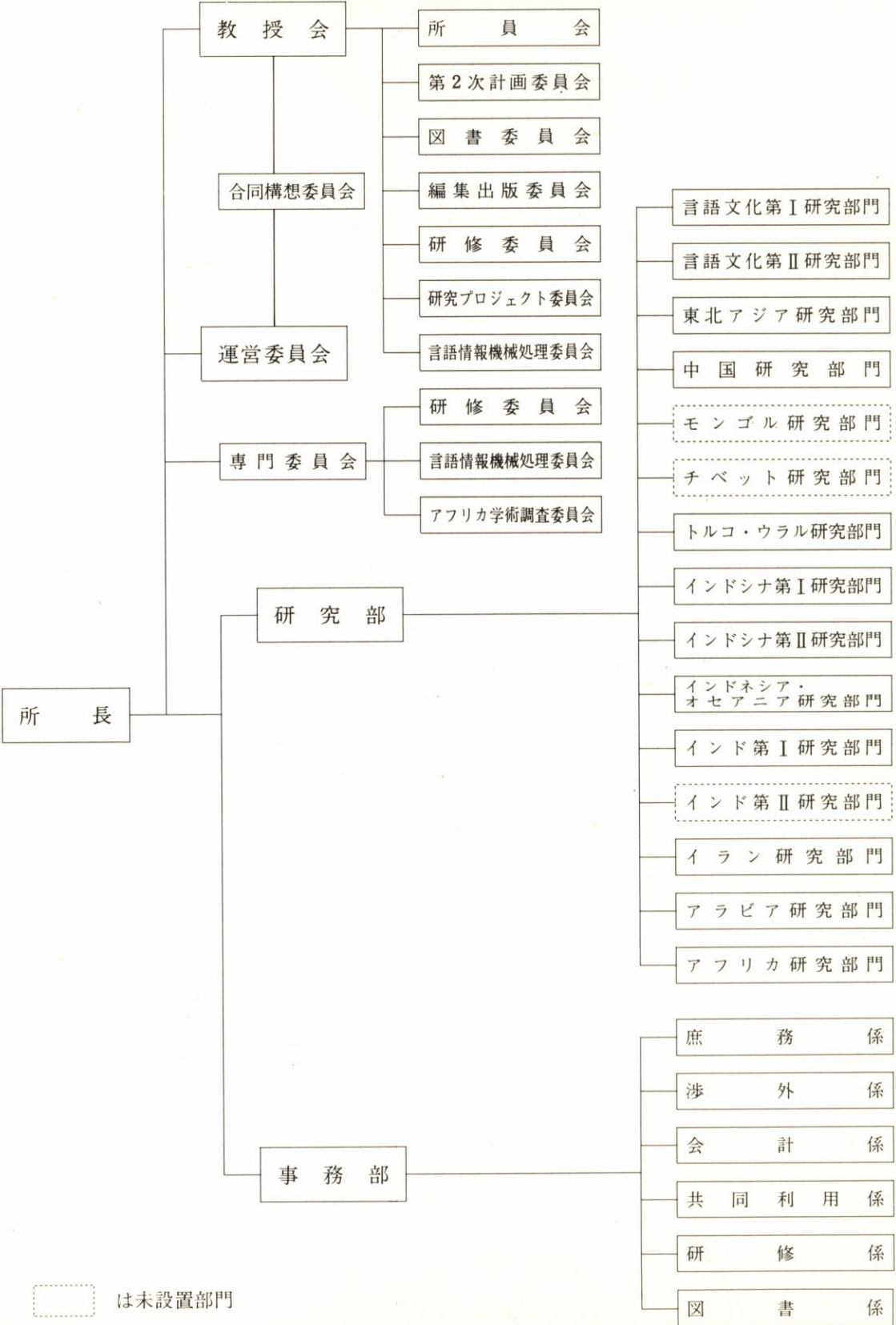
\* \* \*

共同利用研究所はあらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し，相互の接触や交換の機会をつくり，それによって研究の発展・進歩を促すところにあります。

戦後日本の復興が進むとともに，その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後，各方面の理解と協力を得て，1964年4月1日に，東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来，整備拡充が進み，今日では12部門の研究所に成長していますが，今後さらに3部門の増設が予定されています。



# 組 織



□ は未設置部門

## 運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授の組織する教授会において行われますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問を受けます。運営委員には、研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。1976年度の運営委員は以下の通りです。

荒松雄	東京大学教授	富川盛道	所員
石垣幸雄	所員	中根千枝	東京大学教授
石川栄吉	東京都立大学教授	西田龍雄	京都大学教授
伊地智善継	大阪外国語大学教授	服部四郎	東京大学名誉教授
泉井久之助	京都産業大学教授	伴康哉	大阪外国語大学教授
岡田英弘	所員	坂野正高	東京大学教授
小沢重男	東京外国語大学教授	藤枝晃	京都大学名誉教授
小泉文夫	東京芸術大学教授	三根谷徹	東京大学教授
小堀巖	東京大学助教授	護雅夫	東京大学教授
柴田武	東京大学教授	山本登	慶応義塾大学教授
祖父江孝男	国立民族学博物館教授	渡辺武男	東京大学名誉教授
土井久弥	東京外国語大学教授		

## 専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が三つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1976年度の委員は以下の通りです。

### 研修委員会

池上二良(北海道大学教授)、泉井久之助、伊地智善継、小沢重男、柴田武、土井久弥、中根千枝、西田龍雄、服部四郎、半田一郎(東京外国語大学教授)、伴康哉

### 言語情報機械処理委員会

植村俊亮(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)、杉村優(図書館短期大学助教授)、田町常夫(九州大学教授)、中山和彦(筑波大学教授)、長尾真(京都大学教授)、西村恕彦(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)

渕一博(工業技術院電子技術総合研究所研究室長)

### アフリカ学術調査委員会

泉井久之助、今西錦司(京都大学名誉教授)、岡正雄(元所長)、小堀巖、江実(岡山大学名誉教授)、中根千枝、服部四郎、山本達郎(東京大学名誉教授)、和崎洋一(天理大学教授)、渡辺光



# 研 究 活 動

## 共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行なうとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1976年度のプロジェクトと共同研究員は以下の通りです。（カッコ内は研究代表者）

### 言語研修（梅田博之）

アッパース・バーヴァルチー (テヘラン大)	五島忠久（帝塚山大）	西江雅之 (アジア・アフリカ語学院)
ウー・ウン（大阪外大）	サーリム・アブダッラ・ワジール (タンザニア国・法務省)	原田正春（大阪外大）
ウー・カウン・ニユン (京大・大学院)	武居喜春（天理大）	松山 納（東京外大）
大東百合子（津田塾大）	千野栄一（東京外大）	南田みどり（大阪外大）
大野 徹（大阪外大）	ドー・チーチー	宮本正興（立命館大）
奥西峻介（大阪外大）	中島 久（青年海外協力隊）	村崎恭子（東京外大）

### 言語情報機械処理のための基礎的研究（橋本萬太郎）

石沢良昭（聖マリアンナ医科大）	坂井健一（日大）	平山久雄（東大）
伊東照司（東京外大）	佐藤 進（富山大）	吹抜悠子
糸賀 滋（アジア経済研究所）	讃井唯允（都立大）	福田権一（中京大）
鶴殿倫次（東京外大・大学院）	沢村正信（神戸商大）	星 実千代（東京外大）
ウレ・シェリーン（東大・大学院）	杉本隆重（工学院大・大学院）	堀口秀嗣（国際基督教大）
及川昭文（筑波大）	辻本春彦（大阪外大）	本名信行（金城学院大）
大河内康憲（大阪外大）	中川正之（広島大）	増野 仁（都立大・大学院）
大島正二（北大）	中島 久（青年海外協力隊）	松井 透（東大）
尾崎雄二郎（京大）	西 義郎（鹿児島大）	松本 昭（東京教育大）
辛島 昇（東大）	西江雅之 (アジア・アフリカ語学院)	宮本正興（立命館大）
日下恒夫（関西大）	西田龍雄（京大）	梅 祖麟（コーネル大）
慶谷寿信（都立大）	西原鈴子	望月真澄（山梨県立女子短大）
興水 優（東京外大）	ネアック・ソック・チョムラン	余 靄芹
五島忠久（帝塚山大）	久光由美子（お茶の水女子大）	頼 惟勤（お茶の水女子大）

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究 (三木 亘)

アーセム・デスーキー (アシュート大)	古林清一 (大阪女子大)	本多義昭 (京大)
アブドルラヒーム・ アブドルラフマーン(アズハル大)	後藤 明 (東洋文庫)	前嶋信次 (慶大)
池田 修 (大阪外大)	佐藤次高 (お茶の水女子大)	宮治一雄 (アジア経済研究所)
石田 進(中東経済研究所)	嶋田襄平 (中央大)	宮治美江子
木村喜博(アジア経済研究所)	福原信義 (大阪外大)	山田 稔 (東京外大)
	藤田 進 (東京外大)	

アフリカ学術調査 (富川盛道)

赤阪 賢(学習院女子短大)	松園万亀雄 (横浜国立大)	和田祐一(国立民族学博物館)
江口一久(国立民族学博物館)	和崎春日 (慶大・大学院)	
端 信行(国立民族学博物館)	和田正平(国立民族学博物館)	

アジア社会の原構造と変容過程の研究 (飯島 茂)

斯波義信 (阪大)	高谷好一 (京大)	水野浩一 (京大)
末成道男 (聖心女子大)	前田成文 (京大)	渡部忠世 (京大)

アジア・アフリカ諸言語についての文法研究 (奈良 毅)

小田真弘 (中京大)	縄田鉄男 (熊本大)	原 誠 (東京外大)
崎山 理 (大阪外大)	橋本 勝 (大阪外大)	三谷恭之 (京大)
田村すず子 (早大)	早田輝洋 (九大)	山田幸宏 (高知大)

アルタイ学辞典の編纂 (岡田英弘)

加藤直人 (日大・大学院)	志茂碩敏	護 雅夫 (東大)
神田信夫 (明大)	細谷良夫 (弘前大)	森川哲雄 (九大)
小山皓一郎 (北大)	本田実信 (京大)	山田信夫 (阪大)
佐口 透 (金沢大)	松村 潤 (日大)	

インド・パキスタン分離独立の史的 research (中村平次)

伊藤正二(アジア経済研究所)	近藤 治 (追手門学院大)	山口博一(アジア経済研究所)
加賀谷 寛 (大阪外大)	田中敏雄 (東京外大)	山崎利男 (東大)
桑島 昭 (大阪外大)	浜口恒夫 (大阪外大)	
古賀正則 (大阪市大)	森 利一 (琉球大)	

## 言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語の語料を大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史学的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、又アジア・アフリカ諸国との文化的、経済的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用に供されます。この目的のために、一方で各言語の語料に一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、辞学的情報を詳定しておき、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、トライコンやクイックのようなプログラムが開発され、活用されております。アラビア語、中国語、朝鮮語、クメール語、スワヒリ語、タミル語、チベット語などについては、もうデータ入力作業がはじまっています。

ខ្ញុំ បង្រៀនភាសាខ្មែរ ។

フクシハ クメールゴヲ オシエル  
(クメール語)

한 것은 우리 어머니 것입니다

(朝鮮語)

ལང་པོ་ལྷན་འབྲེལ་གྱི་སྐབས་སུ་ལྷན་འབྲེལ་གྱི་སྐབས་སུ་ལྷན་འབྲེལ་གྱི་སྐབས་སུ་

(チベット語)

เมื่อช่วงพ่อบนรามคำแหง เมืองสุโขทัยนี้ดี

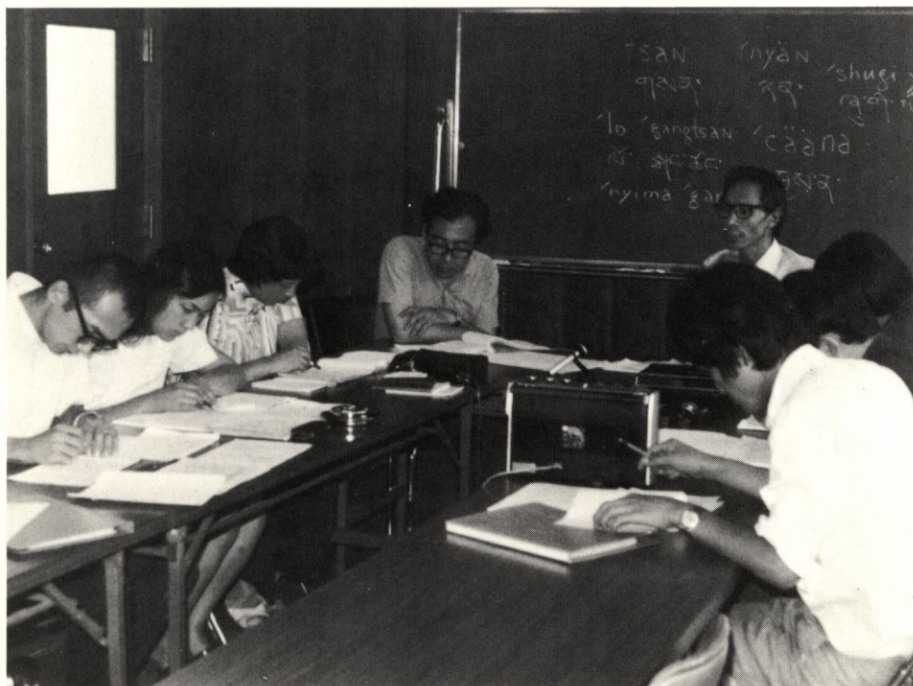
ในน้ำมีปลาในนามีข้าว

(タイ語)



## 言語研修

アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくれている分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、エチオピア語、スワヒリ語、ビルマ語（大阪外国語大学において）、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行なうことになり、当研究所員を中心にその言語を母国語とする人及び日本人研究者の協力をえて、同年の夏には朝鮮語、チベット語の、そして1975年夏にはカンボジア語、ベンガル語の研修が行なわれました。また1976年には大阪でビルマ語、東京ではペルシア語、スワヒリ語の研修が行なわれます。全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、毎日6時間、全38日、合計226時間の研修を受け、全課程を終えた人には修了証書が授与されます。



チベット語研修（1974年）

## 海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行なうことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りで、そのうち、(1)(4)(5)は今年度に至るまで継続されています。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査 1969年～
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査 1970年
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動 1972年
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査 1974年～
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然・生態・文化に関する調査 1975～

カイロの墓石堀り (三木 亘)



ベラ族の美少女 (オート・ヴォルタ北部マルコイの市で)。横に長くたらず髪の編み方、ゆたかな装身具などに、サバンナの南部とはちがった伝統が漂う。  
(川田順造)



## 助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。

この計画は1967年から実施され、現在までに合計10名がエチオピア、タンザニア、ナイジェリア、アラブ連合、インド、モロッコ、香港、ケニア、ボツワナ、ザンビア等々の諸国に派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。



供儀礼拝の後にティカをつけるネワール族の村の人々——ネパール・カトマンズ盆地にて。  
(石井 溥)



## 外国人研究員ほか

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。1976年度までの外国人研究員は以下の通りです。

Gordon T. Bowles

アメリカ 人類学専攻 1967年10月6日～1968年9月15日

Muhammad Anis

エジプト 近代史専攻 1968年10月2日～12月25日

Raouf Abbas Hamed

エジプト 近代史専攻 1973年4月1日～9月19日

Yellava Subbarayalu

インド 南インド中世史専攻 1973年10月1日～1975年10月31日

Fe Aldave-Yap

フィリピン フィリピン国語学専攻 1975年9月20日～12月21日

金完鎮

大韓民国 韓国語学専攻 1975年8月20日～1976年7月31日

Curtis D. McFarland

アメリカ 言語学専攻 1976年2月20日～1977年2月19日

'Abd al-Rahim 'Abd al-Rahman 'Abd al-Rahim

エジプト 中東近代経済史 アラビア語学 1976年6月6日～10月3日

Salim Abdulla Wazir

タンザニア 教育学 1976年6月4日～9月30日

Bhakti Prasad Mallik

インド 言語学 1976年7月13日～1977年3月31日

### 研究生

また研究生の制度があり、大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

# 施設

## 図書室

アジア・アフリカ研究に必要な図書および図書利用のための設備は、共同利用研究機関として重要な要素です。研究所開設以来図書資料は徐々に増加していますが、その充実については今後とも多大な努力を要します。蔵書の中にはアジア・アフリカ地域の国語教育資料、雑誌(385種)、新聞(54種)、世界各国語の聖書、などが含まれています。

図書の他に、マイクロ資料、各種の語学レコードおよび録音テープなどもあり、また利用者の便宜を考えてマイクロリーダーとリーダー・プリンターを備えています。



## 音声学実験室

「アラビア語のイントネーションなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが…」

「フラーニー語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部にすぎません。2台のサウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした種々の音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。そのほか高性能の機器を備えた録音室では、めずらしい言語や、貴重な民話・民族音楽などのテープが複写され、またビデオ録画なども利用しながら研究分析を行なっています。





## 言語情報機械処理準備室

コンピューターへの入力データ作成のために、漢字タブレット1台とカード穿孔機1台とを現在使用しています。

アジア・アフリカの諸言語の中には、インド系の文字を使用しているクメール語、タイ語、ラオス語、ビルマ語、チベット語、インド諸語、アラビア系文字を使用しているアラブ諸語、ペルシア語、ウルドゥー語、ヘブライ語、エチオピア語、それに中国語や日本語のように、文字数の多い言語が多いので、漢字タブレットを利用しているわけです。カード穿孔機の方は、ラテン文字を使用しているインドネシア語やスワヒリ語、ハウサ語などのアフリカ諸言語、それに独特の文字を使用してはいますが文字数の少ない朝鮮語、そして文字のない言語で所員が音声記号で表記して集めた資料などの処理に使用されています。

言語情報処理は、科学技術に関する計算と違って作成するデータの量が非常に多いので、これら入力用機器の整備拡充に力を入れていく方針です。



## 出版物一覽

アジア・アフリカ言語文化研究 Journal of Asian and African Studies, Nos. 1 (1968), 2 (1969), 3 (1970), 4 (1971), 5 (1972), 6 (1973), 7 (1974), 8 (1974), 9 (1974), 10 (1975), 11 (1976).

アジア・アフリカ言語文化研究所通信, Nos. 1 ~ 27 (1966~76).

### アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S. An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary, 1972.
4. NAKANO, A. Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect), 1973.
5. TSUCHIDA, S. Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology, 1976.
6. NAGATA, Y. Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Ayanlık Müessesesi, 1976.
7. YAJIMA, H. A Chronicle of the Rasūlid Dynasty of Yemen, 1976.

### アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満州語口語基礎語彙集, 1969.
2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.

### 共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究—中間報告, 1966.  
アジア・アフリカ諸国—国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票(上・下), 1967.
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. 1 (1968), 2 (1969), 3 (1970), 4 (1971), 5 (1972), 6 (1973).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1 (1970), 2 (1971), 3 (1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. 1 (1972), 2 (1972), 3 (1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1 (1972), 2 (1973), 3 (1974), 4 (述語, 1975).

7. Asian and African Grammatical Manual (アジア・アフリカ文法便覧) 1972~

No. ✓11	Korean (梅田博之)	1973	✓20	African (石垣幸雄)	1975
12b	Fukienese (中嶋幹起)	1976	✓21	Swahili (守野庸雄)	1976
✓14a	Cambodian (坂本恭章)	1974	✓22a	Cushitic (石垣幸雄)	1972
✓14b	Burmese (藪 司郎)	1974	✓23	Hausa (松下周二)	1974
✓14c	Thai (森 幹男)	1975	✓26	Fulfulde (江口一久)	1974
✓15b	Philippines (山田幸宏, 土田 滋)	1975	✓33	Romance etc. (石垣幸雄)	1973
✓17	Persian (上岡弘二)	1976	✓36	Uralic etc. (石垣幸雄)	1976

8. アフリカ部族社会の比較研究： 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって (1971),  
2. アフリカ社会の地域性 (1973).
9. トルコ民族とイスラム化に関する共同研究報告, 1 (1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1, 2 (1975), 3, 4 (1976).
11. Oceanic Studies vol. 1 (1976).
12. インド・パキスタン分離独立の史的研究：資料集 (1976).

AFRICAN LANGUAGES AND ETHNOGRAPHY

1. EGUCHI, K. Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun), 1974.
2. MATSUSHITA, S. A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects, 1975.
3. MOHAMMADOU, E. L'Histoire des Peuls Férôse du Diamaré: Maroua et Pétété, 1976.
4. EGUCHI, K. Poem of Repentance, 1976.
5. WADA, S. Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania), 1976.
6. NAKANO, A. Dialogs in Moroccan Shilha, 1976.

STUDIA CULTURAE ISLAMICAE

1. NAKANO, A. Basic Vocabulary in Standard Somali (I), 1976.
2. MIKI, W. Index of the Arab Herbalist's Materials, 1976.
3. YAJIMA, H. The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean, 1976.
4. NAGATA, Y. Some Documents on the Big Farms (Çiftliks) of the Notables in Western Anatolia, 1976.
5. MIYAJI, K. "Kacem-Ali"—Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie), 1976.
6. MIYAJI, M. L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie), 1976.

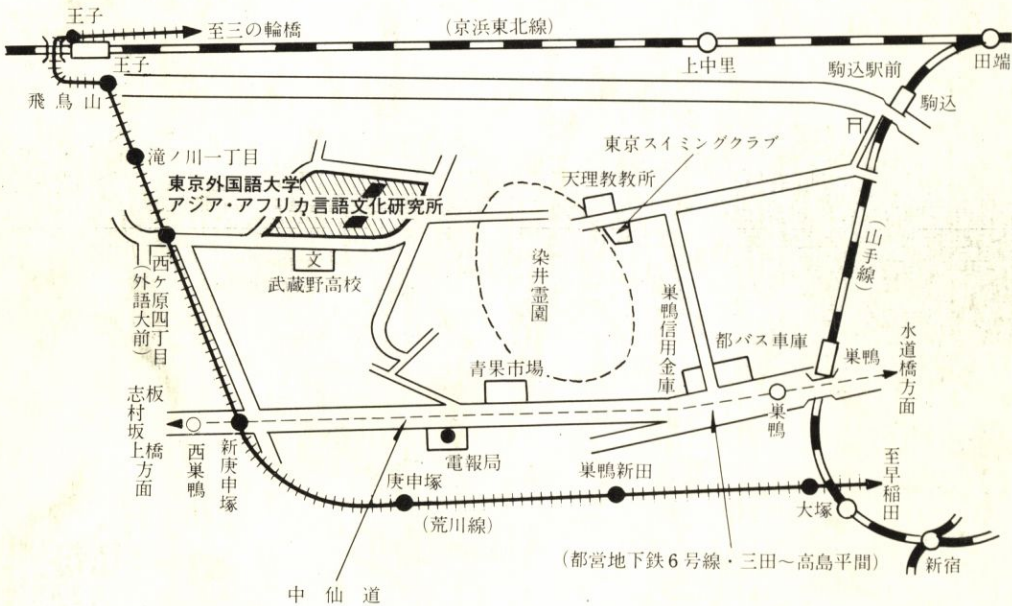
言語研修テキスト

1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊 (1974).
2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊 (1974).
3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊 (1975).
4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊 (1975).
5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊 (1976).
6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊 (1976).
7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊 (1976).



INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES  
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU  
4, NISHIGAHARA, KITA-KU, TOKYO 114  
TEL. 03-917-6111  
Cable Address : GENGOBUNKAKEN TOKYO



東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所

東京都北区西ヶ原 4 丁目 51 番 21 号 〒114

TEL 03-917-6111

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原 4 丁目

(外語大前) から徒歩約 5 分

地下鉄・都営 6 号線西巣鴨下車 15 分